

# 伊野川から忠別川までの地名⑨

今回は、安政四年(一八五七年)、松浦武四郎が、報文日誌の「再篙石狩日誌」で、江丹別川の上流部には、掲載地図(明治三十一年製版複製五万図による地図)のように、サクル(sakuru夏道)とマタル(mataru冬道)の川があることを記録しているが、その二つのルートを検討する。

掲載地図のマタルクシペツ(matarukusipet冬道・通る・川↓現・拓北川)は、雨竜川筋に熊狩りに行った旭川のアイヌの人たちが、春先の帰途、掲載地図の「冬路山(六二五・一丈)」を山越えして、マタルクシペツを通り、近文へ帰ったという。

右の「冬路山」のルートについて最初に言及されたのは、山田秀三氏で、昭和五十八年刊行の『アイヌ語地名研究―第二巻』の「ルベシベ物語の中の、江

丹別川筋の項目においてである。山田秀三氏は、元幌加内町長だった青木哲雄氏から、近文アイヌの人たちが、雨竜川筋での熊狩りの帰途、掲載地図の西河義一氏宅に宿泊して行ったと教えら

れる。そこで山田秀三氏は、西河義一氏宅を訪ねられて、近文アイヌの人たちの帰途のルートを探ると、裏の山すなわち「冬路山」をまっすぐ登って、拓北川沿いに江丹別川へ出ると教えられたのであった。そこで、「冬路山」はマタル(mataru冬道)の意識と初めて理解されたという。

私たちも、山田秀三氏同様に、西河義一氏を訪ねて、右の事実を確認して、そのルートを後日踏査した。

昭和六十年四月二十七日、旭川商業高校郷土研究愛好会部長の姉崎和彦君

と二人で、午前五時三十分、掲載地図の幌加内町下幌加内の西河義一氏宅前をスタートして、尾根伝いに「冬路山」に登り、午前十時三十分には、掲載地図のマタルクシペツ(matarukusipet冬道・通る・川↓現・拓北川)に到着した。記録写真を撮影しながらのゆっくりと歩いた踏査ではあったが、実に快適な踏査であった。写真①は、「冬路山」で、雨竜川方面を写したものである。堅雪を歩くマタル(mataru冬道)は、最短



①冬路山で雨竜川方面を写す



②砂利川で到着記念撮影

距離の歩行が可能で、天候さえ良ければ、快適に通行ができることを実感した次第であった。他方、江丹別川から雨竜川筋へのサクル(sakuru夏道)は、掲載地図のサクルクシペツ(sakrukusipet夏・峠・川↓現・江丹別上流川)である。その川口は、現在は江丹別ダムとなつて

いる。この川を山越えすると、雨竜川支流の掲載地図のヌマウシホロカナイ(Numa-us-horokanay 毛のような水草・多く生えている・後戻りする川↓現・沼牛川)の支流の砂利川に出る。このサクル(sakuru夏道)も、マタル(mataru冬道)踏査と同じ、昭和六十年の六月九日、江丹別ダム上流の旭川市の林道から尾根伝いに歩き、途中から沢に入り、山越えした。江丹別側はかなりの険しい沢であったが、分水嶺は比較的なだらかな笹原。幌加内側は一カ所険しい部分があったが、比較的平坦なコースであった。

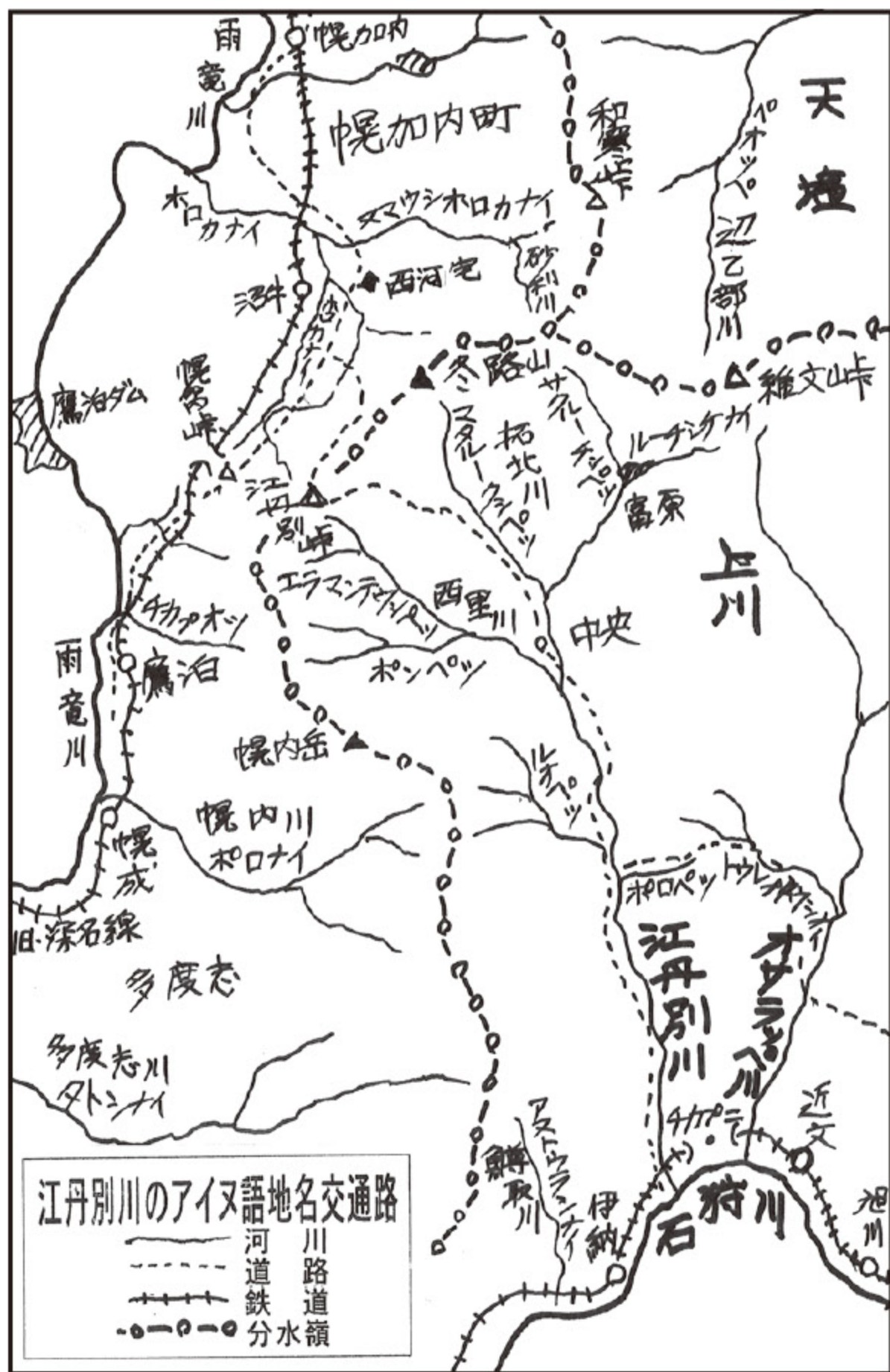
写真②は、砂利川での記念撮影。この踏査の帰途、このサクルのルートに、大正時代に鉄道敷設の計画があり、測量までされた歴史があったことを、沼牛の農家で聞くことができたのも、大きな収穫であった。

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します

## 断章 旭川のアイヌ語地名研究

120

高橋 基



江丹別川のアイヌ語地名交通路